

尚 網 語 文

しょうけいぶん

第 十 一 号

令和四年

菊池氏の活躍を支える者

― 使者、八幡宗安の活躍 ―

..... 武 田 昌 憲 1

戦前子ども向けマンガにおける

映画技法に関する研究ノート

..... 畠 山 真 一 7

研究ノート…土師清二・赤松静太の文章修行

― 日本文章学院の指導と院生の熟達 ―

..... 山 本 歩 14

仮定法に見る主体性育成の差

― 国語科と英語科のはざまで見つけたもの ―

..... 長 倉 伸 子 29

令和三年度卒業論文題目一覧 34

菊池氏の活躍を支える者

― 使者、八幡宗安の活躍 ―

武田昌憲

はじめに

元弘三年（一一三三年）三月十三日、菊池氏による鎮西探題への攻撃、すなわち博多合戦が行われたのであるが、同盟軍の太友・少弐の離反で菊池軍は壊滅的な打撃を受けたのは歴史上でも名高い。その合戦直前に、使者として太友・少弐の間を往来し、最期には討たれてしまう菊池氏の家臣がいた。『太平記』ではたまたま八幡弥四郎宗安と出ているだけで、特に人名を出さなくてもよいと思われるのだが、関係者からすると、人命が記されるだけでも名譽の記事と言えるだろう。その背景を少し、探ってみた。

使者 八幡宗安

鎌倉幕府打倒の戦乱のさなか、九州でも討幕の動きが加速された。

中でも肥後国の菊池氏の動きが活発化。九州の有力大名、少弐氏と太友氏と協力して鎮西探題を討つ約束をしていた。が、いざ、挙兵を促すと、・・・『太平記』巻十一「筑紫合戦九州探題の事」（西源院本・兵藤裕己校注 岩波文庫）では、以下のように記す。

かねての約諾に任せて、少弐、太友がもとへ事の由をぞ触れたりける。

太友は、天下の落去未だいかなるべしとも見定めざりければ、分明の返事に及ばず。少弐はまた、その比、京都の合戦に六波羅常に勝に乗る由を聞いて、己が咎を補はんとや思ひけん、日頃の約を変じて、菊池が使ひ八幡弥四郎宗安を討つて、その頸を探題の方へぞ出だしける。菊池入道、大きに怒つて、「日本一の不覺人ども

を憑んで、この一大事を思ひ立ちけるこそ越度なれ。よしよし、其の人々の与力せぬ軍はせられぬか」とて、三月十三日の卯刻に、わづかに百五十騎にて、探題の館へぞ押し寄せける。

鎮西探題の動きを悟った菊池は、内諾のとおり、少弐と大友に拳兵を伝える。『太平記』諸本では、使いの者は、八幡弥四郎宗安である。大友との交渉では、大友から協力の返事はもらえず、少弐にいたっては、菊池の使者の八幡弥四郎本人がうたれてしまい、証拠として八幡の首を探題に差し出してしまふ。完全に探題方であることを表明している。

『博多日記』（岡見正雄校注 角川文庫『太平記』（一）付録）では、八幡宗安の活躍は三月二十三日の記事に載る。

その前の記事から記すと、

「正慶二年三月十一日、肥後国菊池二郎入道寂阿博多ニ付キ畢ル。同十二日出仕之時遅参之間、不_レル_レ可カラ_レ付クニ着到_一之由、侍所下広田

新左衛門尉ト問答之間、及ビ_二口論_一ニ畢ル。同十三日刀（寅）時、博多ノ中所々ニ付ケ_レ火ヲ燒キ払フ。寂阿ガ築州、江州ニ立_二テ使者ヲ_一申シ云フ。宣旨ノ使ニ罷リ向ヒ候、急ギ可_レキ有ルニ御向ヒ_一之由触_レ廻ル。築後入道ハ、堅槽ニテ此ノ使二人ガ頸ヲ切り、十三日夕方被_レ進ゼ_二匠作ノ方ニ_一。江州ハ可_レキ_二打止ム_一之由被_レ仰セ之間、彼ノ使逐電シ畢ル。

寂阿（菊池武時）が築州（少弐妙恵）、江州（大友具簡）に宣旨の使者を派遣するも、少弐は二人の使者の首をとり匠作（探題北条英時）に進呈する。が大友の方は討ちとどめようとしたが、逐電されてしまったとある。地元、熊本県山鹿市の熊入り温泉の伝説では、この時、大友が打ち漏らした使者こそが八幡弥四郎のようである。

次いで、合戦後の二十三日の記事。

「同日院宣所持ノ仁、八幡弥四郎宗安ト云フ物被_レ切ラ_レ頸ヲ。即チ被_レ懸ケ畢。銘ニ云フ、先帝

ノ院宣所持ノ人八幡弥四郎宗安ノ頸ト云々。此レハ去ル廿日御所ノ陣内ニシテ院宣ヲ大友殿ニ奉ル^レ付ケ之間、即チ召^ニ捕ルト之ヲ^一云々。院宣六通帯^ニ持ス之ヲ^一。大友、筑州、菊池、平戸、日田、三窪、い上六通云々。」

後醍醐天皇の院宣を六通、それぞれ大友（豊後国）、筑州（少弐・筑前国）、菊池（肥後国）、平戸（肥前国）、日田（大隅国か、同書に大隅国御家人日田肥前權守入道が載る）、三窪（薩摩国か）に届けるために活動していた八幡が、大友のところに向き、そのまま召し取られたことになっている。院宣は六通以外にも、すでに有力武士何人かに手渡ししているのかもしれない。鎌倉幕府・鎮西探題からすれば八幡はもともと厄介な存在だといえる。

これらの戦いは、菊池が大友・小弐に事前に知らせることなく探題館を討てば勝利は得られたはずである。『太平記』では探題北条英時が菊池に追い込まれ、自害直前まで来たとき、少弐・大友の大軍六千騎が救援に駆けつけ菊池の背後を襲い、探題の窮地

を救うのであった。まさに菊池の悲劇というしかない。

地元の伝説

熊本県山鹿市は県内有数の温泉郷として知られる。『保元物語』でも活躍する、宇野七郎親治がこの地に配流されたとき、山奥に鹿が湯に浸かるのを見て、温泉を発見したことから山鹿温泉の名がついたといわれる（『山鹿市史』上巻、昭和六十年）。その隣に八幡弥四郎宗安の見つけた熊入り温泉がある。

熊入温泉の由来には以下のように掲げている

「当温泉は人皇九十五代花園天皇の

御世（六八三年前）隈入城（龍爵城）

主八幡弥四郎宗安の発見に由るもの

である。宗安は菊池公に仕え豪強を

以って聞こえ菊池武時公北条英時を

博多に攻むるに当り宗安の強勇に

して忠誠なるを以って選ばれ元弘二年

（六三四年前）三月 後醍醐天皇の命を

承け菊池少貳大友以下六人に賜わ

った勅書を奉じ大友貞宗の館に使

したるに約に背きたる大友のために

欺捕され重き刀傷を負い遂に武勇を

戦場に揮うこと能わず辛うじて帰城し

この出で湯で治癒したと言われる

その由来に因り子孫が大衆のために

浴場を開き以来幾多の栄枯盛衰を

克服し今日の熊入温泉に至っている

平成二十五年十月吉日

（熊入温泉センター「温泉の由来」による）

九州での討幕戦の最初の記事に、八幡宗安の活躍が記せたことは、この地の人々の誇りとなったことだと思われる。

大友氏へ使者として向かった八幡は、大友に討ちとられそうになり、重傷を負いながらも辛くも生還でき、自分が発見した熊入りの湯で戦傷を癒し、再び院宣の使いとして出かけ、ついに三月二十日に捕らえられて、二十三日に斬られてしまった、とみる

こともできそうである。また三月二十日に大友に捕まったとしながらも抜け出て、熊入りに戻ったとも想像できるが、この場合、さらされた頸の問題が残る。偽頸まで考えると考えすぎかもしれない。ともかく、八幡は先帝・後醍醐天皇の宣旨を九州にもたらした忠臣の一人というべきであり、『太平記』で簡単に取り上げられ、読み飛ばしてしまい、次の博多合戦や、菊池親子の別れ、いわゆる「袖ヶ浦の別れ」に目が向きそうであるが、地元での扱いは想像以上のものである。

現在でも、八幡弥四郎宗安の子孫の方（三森、中原、船津、永田）が、温泉を維持されている。効能の最たるものに、外傷性諸障害（鹿本郡誌 全「昭和四九年」）がある。八幡が自分の本拠地で刃傷を癒せた伝説も首肯できるだろう。熊入り城（隈入城・龍爵城）は八幡の居城の可能性が高い。この辺りを支配するには適地である。江戸期は湯治場として繁栄した。地名としては、熊入り村等が合併して、八幡村が一時存在。八幡地区に市立八幡小学校がある。同市杉にある日輪寺は菊地武時が正和五年（一一三六）に再

興したとされ、武時の供養塔や武時の娘（了心素覺尼）の墓もある。八幡の命日には供養するという。

『太平記』に名前が記されたのも、「太平記」作者や菊池氏との深いつながりあつてのことであるだろう。地元から菊池氏へ、菊池氏から太平記作者へ記事の提供なども想像して見ると面白い。おそらく『博多日記』のような記事から再構成して、博多合戦後の八幡の最後を博多合戦前の、菊池武時の怒りの発露として取り上げたのであろう。

使者として

『太平記』のこの九州探題討伐の段を見みると、使者の登場が目立つことに気づく。

使者を殺めて、鬱憤、仕返しの対象とする、気の毒な対象である。また、一方では、使者として送り出されることだけでも武士の本懐・名誉なことであるかもしれない。

さて、菊池が鎮西探題討伐に失敗してから、世間の情勢が官方優勢になっていく。

この部分、天正本『太平記』（新編日本古典文学全集・

小学館）では、

さても少弐・大友が今度の振る舞ひ人にあら
ずと。天下の人口に惡み警られながら、暗知ら
ずして世間の様を聞き居たりける程に、五月
十七日兩六波羅責め落され、千早の寄手も南都
へ引き退きぬと聞えしかば、少弐入道、「こはい
かがすべき」と仰天す。思案の内に、「さらば探
題を誅ち奉つて、我が身の咎を助からばや」と
思ひければ、まづ菊池肥後守と大伴入道が許へ
使者を遣つて相語らふに、菊池肥後守思ひける
は、同心の体にて、先の様に出し抜いて、怨を
報ぜんと思ひけるが、いやいやそれまでも怵へ
かたし、こここそ以前の憤りを散ずるところな
れとて、少弐が使を食し取りて首を斬り、「探題
を誅ち給ふは、その戦場にて見参すべし」と返
事して、父の最後の鬱憤をしばらく散じぬと悦
んで、嘲る事限りなし。大友は、我も咎ある物
なれば、かくしてもや助かると、堅く領状して
けり。

傍線部分が天正本の独自記事で、西源院本は「菊池は先に懲りて、耳にもききいれず。」と記すだけである。使者の安否は記さない。天正本の菊池の少弐に対する恨みは、使者の首をとるくらい、深いものであったことがわかる。

一方、探題の北条英時も少弐の動静が気になり、使者として長岡六郎を送る。長岡六郎については「福岡県筑紫野市（筑前国御笠郡長岡郷）の武士」（西源院本『太平記』・岩波文庫186ページ中による）説があり、八幡弥四郎のように地元の伝説が眠っているかもしれない。

長岡六郎の最後は以下のように『太平記』（西源院本）に永遠に記されることになる。

英時、少弐が陰謀の企てを聞いて、「事の実否を伺ひ見よ」とて、長岡六郎を少弐がもとへぞ遣られる。（中略）新少弐は何心もなげに出で合ひたり。長岡、座席に着くと均しく、「まさなき人々の謀叛の企てかな」と云ふままに、腰の刀を抜いて、新少弐に飛んで懸かる。新少弐も、あくまで早き者なれば、傍なる将棋の盤を

取って、突く刀を請け支へ、長岡にむずと組んで、上を下にぞ返しける。やがて少弐が郎従ども、あまた走り寄り、上なる敵を三刀差いて、下なる主を助けければ、長岡、本意を達せずして、忽ちに命を止めてけり。

使者の最期の記述が、そのまま使者への供養になる気持ちがかかる場面である。

（続く）

戦前子ども向けマンガにおける

映画技法に関する研究ノート

畠 山 真 一

1 はじめに

本ノートは、マンガ研究において蓄積が進んでいる映画との比較研究に関する覚書であり、とくに戦前子ども向け物語マンガにおけるコマ割りと古典的ハリウッド映画における「コンティニューティ編集」の影響関係を考察するための基礎的な概念の洗い出しを目的としている。ここで戦前子ども向け物語マンガとは、児童漫画ブームが確立された時期である1930年から1941年までに出版されたマンガ作品を指す。

本ノートの構成は次のとおり。次節において、古典的ハリウッド映画を律するコンティニューティという概念を説明する。3節において、マンガ研究におけるコマ割り研究の蓄積を概観する。4節において、

先行するマンガ研究がカヴァーしていない領域が、戦前子ども向け物語マンガにあることを指摘する。さいごに5節でまとめをおこなう。

2 古典的ハリウッド映画における

コンティニューティ

本節では、「ショット」、「シーン」、「古典的ハリウッド映画」、および「コンティニューティ」という古典的ハリウッド映画分析で用いられる基礎概念について述べる。

「ショット」とは、映画においてカットによって分断されるまで連続的に記録されたカメラの映像である。一方「シーン」は物語における意味的なひとまとまりを指し、基本的には「ある特定の時間・場所

に出現する「一連の出来事」を意味する。「食事シーン」を例にとれば、これは、食事における「茶碗をあげる」、「食物を口に運ぶ」、「咀嚼する」といった一連の具体的な動作の複合体である。古典的ハリウッド映画は、シーンを基本的に複数ショットに分割して提示する。

「古典的ハリウッド映画」は、Bordwell et al. (1985)により規定された映画ジャンルであり、広くは1910年代から1960年頃までの物語の伝達効率を重視して制作されたハリウッド映画を指し、その映像・物語・音響などについて多くの知見が積み上げられている。古典的ハリウッド映画で利用される技法は、現代娯楽映画の基盤となっているため、古典的ハリウッド映画研究は、映画研究の基礎をなしていると言える。

古典的ハリウッド映画は、「映画が語る物語の背景となる時間と空間が連続的に提示される」、「登場人物の心理状態や因果関係がはっきりしており、わかりやすい物語である」という2つの特質を持つ（北野 (2017: pp.66-72) のまとめを参考にしている）。先に述べた「コンティニュイティ」とは、この時空間

および物語の語りに関する連続性を指す。

時空間の連続性を達成するコンティニュイティに関しては、いくつかの編集ルールが重要である。編集とは、先に述べたショットやシーンの接続を意味するが、古典的ハリウッド映画においては、その接続にいくつかの原則が存在することが明らかになっている。その中で特に重要なのが、アイライン・マッチ (eyeline match) と180度ルール (180 degree rule) である。

アイライン・マッチは、登場人物がスクリーン外に視線を向けるショットがあった直後に、その登場人物が視線を向けた対象を映し出すショットをつなげるという編集手法である。たとえば、図1と図2は『結婚哲学 (The Marriage Circle)』（エルンスト・ルビッチ監督）の4分37秒から続く連続したショットである。ここでは、男性（ジョセフ・ストック）が手紙を覗き込むショットに続いて、その手紙の内容が映し出されている。このように、視線を向けるというショットに続いて、その視線が捉える対象が映し出されるショットが出現するという編集がアイ

ライン・マッチである。

一方、180度ルールは、2名のキャラクターが相対するシーン（典型的には会話シーン）において、その2名のキャラクターを結ぶ線（いわゆるイマジナリー・ライン）を越えるカメラによって撮影された2つのショットを連結すべきではないと言う原則である。

たとえば、典型的な会話シーンでは、まず会話する二人が映し出され（いわゆるエスタブリッシング・ショット）、そ

の後、話をするキャラクターのそれぞれが映し出されるのだが、一旦エスタブリッシング・ショットにおいてカメラの位置がイマジナリー・ラインのどち

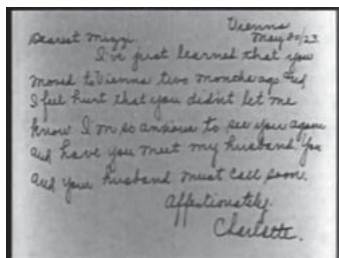


図2 手紙の内容



図1 手紙を見るジョセフ・ストック

ら側かに置かれると、そのカメラがイマジナリー・ラインをまたぐ移動（イマジナリー・ラインを超えた場所から撮影したショットを連結すること）は原則的

にはむずかしい。つまり、図3のカメラが一度手前側に置かれた場合、手前側においては、自由に移動可能だが、イマジナリーラインを超えた場所に置かれたカメラからの映像につなぐことは原則的にむずかしい。これは、古典的ハリウッド映画においては、キャラクターの視線の向き的一致が要請されるからである（ある種のアイライン・マッチとも言える）。

当然のことであるが、映画は画面（＝フレーム）に映し出されるものしか見えないため、物語空間をフレームの外にまで拡張しようとするときは、次に述べる「カメラの運動」をのぞけば、ショットの連

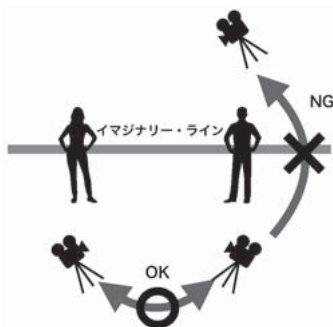


図3 180度ルール

結によってのみ可能となる。このショットの連結による物語空間の拡張を最大限なめらかに（観客に解読の負担を与えないように）しようとする試みが、前述の古典的ハリウッド映画に典型的な編集ルールと言える。

古典的ハリウッド映画では、物語における最重要被写体を画面の中心に据えるため、ショット分割に加え、いわゆるズーム・イン、ズーム・アウト、パン撮影、そしてドリーと呼ばれる台にカメラを載せてレールの上を走らせながら撮影するトラッキング・ショットといったカメラワークが利用されるようになったとされている。これらのカメラワークの中で、パンやトラッキング・ショットは、先述の編集技法と同様に、空間的コンティニュイティを保ちながら物語空間をなめらかに拡大するための装置とみなすことができる。

3 現在までのマンガ研究はコマ割りに

ついて何を明らかにしてきたか

現代的なコマ割り分析の前提となっているのは、

留保付きではあるが、戦前マンガ作品は1シーンで1コマで表現していたのに対し、手塚作品以降の現代的なマンガ作品は、1シーンを複数のコマによって分割して描写すると述べる呉（1989）の論考である。この論考以降、コマとコマの接続を映画におけるショットの編集と基本的に捉えることによって、様々な比較研究が行なわれてきた（竹内 1993; 秋田・2005; 大塚（編）2011; 三輪 2014）。特に、先に述べた古典的ハリウッド映画におけるアイライン・マッチや180度ルールとマンガの関係性については重要な研究が積み上げられてきている。

アイライン・マッチは、マンガにおいて、図4のようなコマの接続で例示されるものであり、（モンタージュ型の）「同一化技法」（以後、単に「同一化技法」と呼ぶ）と名付けられ（竹内 1989）、その読者への効果およびその成立史が問題となってきた（宮本 1998）。また、180度ルールについては、現代的なマンガにおいてはしばしば遵守されないケースがあることが報告されており（泉 2012）、マンガと映画の差異として重要視されている。

4 先行研究の課題

前節で述べた先行研究には、次の4つの課題を指摘できる。

- (1) コンテュニユイティという概念が十分に利用されていないこと
- (2) 戦前子ども向け物語マンガについては、同一化技法にのみ研究が集中しており、その他の映画的手法に関して分析がなされていないこと
- (3) 呉 (1986) の主張とは異なり、1シーンが複数コマに分割されているが、談話レベルのコンテュニユイティが画像レベルにおいて維持されていない事例が、戦前物語マンガに観察されること
- (4) 仮想的カメラの運動を思わせる1シーンのコマ分割が観察される事例が分析されていないこと

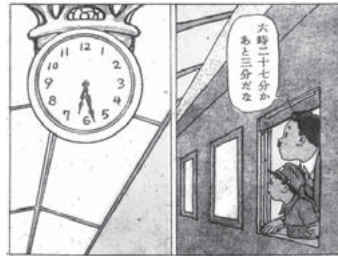


図4 『汽車旅行』より

順に説明していこう。

(1) は分析方法に関わる課題である。現在までのコマ割り分析において、コンテュニユイティ概念を利用した研究は、基本的に180度ルールの適用と同一化技法に議論を集中させており、コンテュニユイティという原則にもとづいた包括的なコマ割り研究は現在まで提出されていない。この種の原則にもとづいた包括的なコマ割り研究の不在は、まず第一に克服されるべき課題である。

(2) は分析対象の限定にかかわる課題である。本研究が対象とする戦前子ども向け物語マンガのコマ割りについては、同一化技法以外の映画的手法を議論する研究が管見の限り見いだすことができない。この点も、歴史的なコマ割り分析を行う上で克服されるべき課題であると考えられる。

(3) と(4) は呉 (1986) の言う「1シーン≡1コマ」の原則が、戦前子ども向け物語マンガにおいて破られているケースが観察されるという点である。順に説明しよう。

(3) の談話レベルのコンテュニユイティとは、セリ



図5 『のらくろ二等兵』より



図6 『のらくろ二等兵』より

フの水準における連続性であり、ひとまとまりの談話において観察されるものである。図5の『のらくろ二等兵』の例でいえば、1コマ目のセリフである「やれやれやつとこさ入営したがまだ何もわからない」と2コマ目のセリフ「だけどうれしいな。今日から

軍人だぞ。勇ましい姿だなア。」(適宜句点を補った)は、時間的に連続したひとまとまりの談話とみなすことができるため、談話レベルではコンティニューティがある」と認められる。これ対し、1コマ目と2コマ目の画像レベルではコンティニューティを認めることができない。これは、主人公の「のらくろ」は、1コマ目では室内におり銃とサーベルを手にしてい

ないが、2コマ目では突然部屋の外に出て、いつの間にか銃とサーベルを手にしているためである。したがって、この2コマの接続は、談話レベルでの1シーンが、画像レベルでのコンティニューティのないうまにコマ分割されている例と分析される。

この事例は、古典的ハリウッド映画や戦後の物語マンガには見られない種類のショット／コマ分割が戦前子ども向け物語マンガにおいて出現していることを示しており、コンティニューティという視点を持ち込むことで初めて分析可能になるものである。

(4)は、図6に例示されるような事例である。図6は、連続するコマがなめらかに物語世界を拡張している例であり、映画におけるパン撮影をマンガ的に実現したものともみなすことが可能である。この種の事例も、呉(1989)の言う「1シーン＝1コマ」の原則からは逸脱したものであり、かつ映画的手法が利用されているとみなすことができる重要な事例と考えられるが、先行研究では議論の対象となっていない。今後の研究において、これらの課題に取り組むことによって、戦前子ども向け物語マンガと手塚治虫

にはじまると一般的にされているストーリー・マンガの連続性と差異が、よりクリアな形で分析可能になることが期待できる。

5 おわりに

本研究ノートでは、古典的ハリウッド映画研究の観点から戦前子ども向け物語マンガを分析するという視点の重要性について述べ、必要な分析装置の洗い出しを行った。

参考文献

- 秋田考宏(2005)『「フム」から「フィルム」へ』NTT出版
- Bordwell, David(1985). *Narration in Fiction Film*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Bordwell, David, Janet Staiger, and Kristin Thompson(1985). *The Classical Hollywood Cinema*. New York: Columbia University Press.
- Branigan, Edward(1992). *Narrative Comprehension and Film*. London and New York: Routledge.
- 北野圭介(2017)『新版ハリウッド100年史講義』平凡社
- 呉智英(1989)「ある戦後精神の偉業」手塚治虫の意味」竹内オサム・村上知彦(編)『マンガ批評体系別巻(手塚治虫の宇宙)』平凡社
- 三輪健太郎(2014)『マンガと映画』NTT出版
- 竹内オサム(1989)「手塚治虫の映画的手法」竹内オサム・村上知彦(編)『マンガ批評体系第3巻』平凡社
- 宮本大人(1998)「マンガと乗り物―『新宝島』とそれ以前―」霜月たかな(編)『誕生！手塚治虫』朝日ソノラマ
- 大塚英志(編)(2012)『まんがはいかにして映画になるうとしたか―映画的手法の研究』NTT出版
- 泉政文(2011)『「龍神沼」における映画的手法について』大塚英志(編)『まんがはいかにして映画になるうとしたか』NTT出版
- 四方田犬彦(1999)『漫画原論』ちくま学芸文庫 筑摩書房

研究ノート…土師清二・赤松静太の文章修行

— 日本文学学院の指導と院生の熟達 —

山 本 歩

一、本ノートについて

カウフマンとベゲットは人の發揮する創造性 (Creativity) を「BigC」「Proc」「little-c」「mini-c」

の四つの水準に分類している⁽¹⁾ (既存の「Big」「little」の二分類に他二者を加えたもの)。それぞれ、社会的インパクトのある偉業、未評価を含むエキスパートの業績、日常の中の個人的な発明や上達、基礎的な訓練の中での試行錯誤が相当する。さてこのうち「mini-c」という観点は、他者にとっての新規性や有用性ではなく、初学者個人の試みや取り組みを創造性⁽²⁾と見なすものである。いわば、その領域内での成果物の価値ではなく、創造的になっていくプロセスに着目したものである。美術家の創造性を研究する横地早和子は、表現方法や素材の違いこそあれ美術家と小説家の「本質的な創作の仕方や思考の仕方は

相当程度の類似性がありそう⁽³⁾」と述べており、こうした創造性研究は、小説を書く人の熟達化を検討する視野を、文学研究にももたらしてくれる。

明治後半期に活発化する出版物での小説指導は、ほとんどの場合、若年層の初学者を対象としたものだった。そのため、小説という領域における「mini-c」発生を補助する役割を持っていたと言つてよい。とすれば、指導言説と受容者との関係を問う際に、言説によつて受容者が良い小説を書けたかどうかや、明確に上達／成功したかどうかばかりを論じるべきではない。重要なのは社会的な基準による評価ではなく、受容者その人にとって新しいことができたか、(たとえ失敗したとしても) 試みられたことがあるのかということである。

ここで、新潮社の通信教育機関「日本文学学院」⁽³⁾

の文章指導、ないし小説指導の意義を、「院生」と呼ばれた被指導者の熟達を参照する中で見出してみたい。院生は毎号の講義録に添付されている添削券を用いて、同学院に作文の添削を依頼することができた。また、そうした文章修行の成果を機関誌『新文壇』（明治四十一年一月〜大正五年三月）に投書することができた。投書は採点の上、一定数が掲載され、特に上位には金子薫園、佐藤浩堂（義亮）の選評も付された。入選の常連は幾人もいるが、今回は赤松静太に絞って、主に「佳作」欄、「抒情抒事文」（のち「抒情叙事文」）欄に掲載された文章から、その変化や試行錯誤を読み取ってみたい。赤松静太は日本文章学院を中心に文章修行を行い、やがて土師清二の筆名で大衆小説作家として活躍することになる。とすれば、『新文壇』で培った創造性が、どのような発展に繋がっていったのかを観測できる可能性がある。

二、土師清二・赤松静太について

赤松静太、のちの土師清二は明治二十六年、岡山県に生まれた。父を亡くしたため、小学校高等科を退

学、働きに出る。丁稚奉公の時分から和歌に親しみ、『大阪履物商報』にしばしば投稿した。四二年頃、活版用具店に勤める傍ら、夜学に通い、日本文章学院にも第一回生（明治四四年頃）として入学。四五年、同郷人・石川安次郎（半山）を頼って上京、三田英語学校、二松学舎、本郷豊岐坂教会の自由講座等に学び、翌年帰郷。大正二年から石川同様の新聞人となる。大阪朝日新聞に勤めていた一一年、『旬刊朝日』（後の『週刊朝日』）の創刊に貢献、編集部員となったが、翌一二年、同誌に土師清二の筆名で歴史小説『水野十郎左衛門』を連載し、本格的に作家として出発する。代表的な長編『砂絵呪縛』（昭和二年）をはじめ、歴史小説などの大衆文学を精力的に書き続けた。⁴昭和五二年没。

『新文壇』への投書にあたっては、本名の他「赤松辰村」「関伽末死途太」の筆名を用いている。彼に先駆けて従兄、赤松桂山が常連投書家として注目されていたことも特筆しておきたい。病衰の末に夭折する桂山の有様を、土師は「従兄」「穴まで」に描いている。投書の住所表記は四四年から四五五年にかけて

「岡山市内山下」(活版用具店の所在地)となっており、それが上京によって「下渋谷」に変わるのは大正元年十一月のことである。本ノートではひとまずその時期を区切りとし、四四年三月から翌一月までの六編の投書を取り上げる。『新文壇』掲載作の引用にあたっては、紙幅の都合上、改行を略し「／」で代えた。旧字は原則として新字に改めたが、送り仮名等は原文のままとした。ルビは適宜省略したが、傍点は全て原文通り付した。なお、表題の後に付した数字は得点である。

三、赤松静太の『新文壇』投書作

○四巻六号(明治四四年三月)「懸賞短文」二等、「初春のスケッチ」(「赤松静太」名義)

「懸賞短文」は、薫園によれば「特に看るべき作は、殆ど一篇もなかった」ため、一等は該当作なし。二等として、赤松静太のものが採られた(寺島五暁と同時受賞)。「初春のスケッチ」「隣家の人」「五分間の記事」の三つの課題の内、赤松が選択したのは「初春のスケッチ」である。

ボンボン、心地の宜い柏手の音が、野良一面に這うた白い靄の中へ消え込む。と祝詞の声が聞こえ出した、老先生の家の高い土塀を越えて。土塀の上には、古びた国旗が緩やかに揺れてゐる。厠の辺りから牛の鳴き声が聞こえた。

評、何となく寒い中に暖かい感じが混つて居る。初春の感じをよく表はした作。(浩堂)／
柏手の音、祝詞の声、国旗の揺ぎ、牛の声：
∴ 此等を蔽ふに白い靄を以てして居る。恍として此の景趣の中に読者を誘ひ入れしめる。
渾然たるに近い。(薫園)

「混つて居る」「渾然たるに近い」という評言から、事物の指示が断片的ではなく、混じり合つて一個の空間を作り出していると評価されているようだ。特に薫園の想像においては「白い靄」が想像の中で事物の境界を曖昧にしているようである。レトリックの上でも、「柏手の音」↓「白い靄」、「祝詞の声」↓「老先生の高い土塀」↓「古びた国旗」／「厠の辺り

から牛の鳴き声」というように、指示が即座に次なる指示へ移る。これは「短文」という形式上の制限からもたらされたものだが、情報量を圧縮した文章になっている。

○五巻二号（明治四四年五月）「抒情叙事文」欄、「此頃」（63）（「赤松静太」名義）

四月廿八日。／ピンで止めた夢二氏の「鐘の音」と云ふ画に、悲しげに眠気の我をさそふ午後、紅き君見るこゝろ慄く。と書いて見る。／五月一日。／風呂帰り蟲聴を聴く。ジ……／ジを連続してジ——也。初めての蟲声、初秋の趣きあり。哀思胸をつく。／五月三日。／午後六時頃、集金の帰途、旧天城屋敷でスケッチ帖を出して写してみた。／溜池には去年の冬枯に散つた、木葉が朽ち沈んで、底の土が見えぬ。思ふに底の底は、二年も三年も五年も十年も前に散つた葉も有るだらう？今此の池にのぞき込んでゐる葉は蒼い。そして夏に成ると、益々茂る。／それで、①冬枯には、嫌でも何でも散らなければ

成らぬ。池に沈まねば成らぬ。終りは泥濘に成らねば成らぬ。／鶯色に枯れた蓮が丁度、数多枯枝でも投げ込んだやうだ。／その間に皿程の新葉が浮いてゐる。濃青な葉は勢がよさうだ。／池の南には築山が有つて、牡丹屋根の小さい朱塗の祠が淋しく立つてゐる。／築山を越えて向ふに土蔵が見える。／（中略）／蘇鉄は枯れてゐるのか、葉も出してゐない。其無気味な事たら、丁度象が仰向いて足を突立てゝゐるやうだ。／母屋でも在つた所か、卅坪ばかりの広場には蒼い草が茂つてゐる。取残された、片隅の形ばかりの板塀は淋しい。

評、プツ／＼切れてゐるいくつかの断片の中に作者の感味が、それ／＼新しく盛られて居る。触目する所、必ず趣あらしめねばやまぬと云ふ書き方だ。（薫園）

これは日記文の体裁を取りつつ、中盤以降は「五月三日」に行われた天城屋敷（倉敷市）の「スケッチ」すなわち叙景文となっている。薫園の理解は先の懸

賞短文とは異なり、個々の描写を断片的なものと取ったようだ。ただしその断片にそれぞれ「作者の感味」が認められ、いずれも見るべき表現とされたようだ。

日記文と写生文、志向する形式が明瞭であるため、日本文章学院の指導、すなわち『文章講義録』の各講義が反映されているかが、比較の見やすい文章でもある。『文章講義録』において、最も基礎的なものと位置づけられた金子薫園「文章作法」は、第二章が「日記文作法」に割かれている。「此頃」冒頭の「四月廿八日」「五月一日」の記述は「なるべく要点を摘んで、出来るだけ簡潔に書くように」（七四頁）という日記文の基本に沿っている。無論、もっと長いまとまった記述、例えば「半日の遊記」（八六頁）のようなものを書くコツについても言及があり、「五月三日」の記述は決して指導に背くものではない。だが、その内容はどちらかと言えば第三章「写生文作法」の影響が感じられる。適当な範囲と中心点となる事項を定め、「付随事項の叙述が長過ぎると見たら、省略を加へて散漫を防がねばならぬ」（一五九頁）と言い含めるその指導から、土師の文章は大きく外

れていない。彼が推敲の中で省略を行ったかどうかは窺い知れないが、薫園が評するように、個々の事物には「勢」や「淋し」さ、「無気味」さ（二重傍線部）が見出され、一々意味が与えられている。少なくとも無駄な記述とまでは言えまい。またそもそも、「文章作法」の写生文指導では野外の文章スケッチが強く奨励されており、土師がスケッチを行ったのもそれを受けてのものと考えられる。

傍線①のような、眼前の風景を越えた予期的な記述、世界観や人生観とも取れる含みのある文言は、写生文において「省略」すべきものだろうか。だが、浩堂編述とある「創作百話」に目を移すと、叙景文における描写と説明の割合に言及がある。「処々簡単な批評や説明を入れるのは、却つて文章を活かせる方法」（八六頁）とされ、正宗白鳥『二家族』に「批評や説明や自己の感想」を主とした叙景文の例を求めている。①は直接的な描写を逃れる感想を挿入して単調さを避ける技法を用いている意味で、こうした指導に則っている。なお「創作百話」は、これ以降も小説作品を範として叙景・叙情文における描写

と説明（及び批評や感想）の配合バリエーションを紹介しており、こうした指導に触れた投書家たちは、写生文・叙景文・叙情文を試作する中で、自然に小説的な文章を模倣することになる。こうした環境は、後述のように事実在即した作文を繰り返した土師が、やがて小説を書くに至る経路を考える上で、注意すべきものだろう。

また、指導に沿う工夫がなされた作が掲載されること、それは投書家にとってみれば、指導に従うことの正しさや、工夫を行うことそのもののメリットを実感させるものであっただろう。

○五巻四号（明治四四年七月）「抒情叙事文」欄、「牛肉屋の女」（67）（赤松静太）名義

牛肉屋の女は丸髻で美しい。／①私の眼の所為か、何処かに野卑な所がある。新平民と云ふ者はこんなのでは無いかと思はれてならぬ。／
鬨を跨ぐと直ぐ脂切つた粘著的な悪臭がぶんと鼻にくる。／緋削とした撫肩、ふつくらとした鬢や髪の揺らぎ、白い頸筋。／それが肉を切る

音に調子を合わせたやうに動く。／②私は沁々思つた。彼女に対する嫌惡の念を私の胸からすっぱり去り度い。何時もあの美しい後姿のみ見てゐたいと。／「今日は。」／若い男が自転車で前を通つた。／「今日は。」／彼女の声は大きかつた。自転車で走つた男を追かけるやうに言つた。／「誰やな？」／女の後で縫物をしてゐる六十ばかりの老婆が眼鏡越しに女を見た。／「竹さん。」／「む、竹さんか。」／素氣無さうに老婆は言つて、又縫物を始める。③組板の下に、ペンキ塗の大箱が一個置かれて、牛の骨が、堆積された。蠅が黒く成つて呻つてゐる。

評、氣は利いて居るが、何処か煮え切れない処がある。（薫園）

前半は表題の通り、「牛肉屋の女」に対する人物描写文である。だが、單なる觀察ではない。傍線①②のように、「私」は自らの差別的な印象を半ば自覺しつつ、先入觀を取り除こうと試みている。小栗風葉「小説作法」では、「偏狭な先入の考へ」が人物の觀

察を曇らせる危険性が指摘されており（七〇頁）、まさにその点に注意を払った観察となっている。ただし、傍線③の店の描写は、むしろ不快な光景を務めて探しているようでもある。本作は後半部が会話文と③の描写に占められ、その意味でも「煮え切れない」不徹底さを見せているとも言えよう。個々の記述が切断されており、懸賞短文のような「渾然たる」印象はないかも知れない。

ただいづれにせよ、自らの知覚に対するメタ認知を織り込んだ表現は、世界観・人生観に踏み込んだ前作とは異なる内観的描法を達成している。これは、小栗風葉「小説作法」で言い含められる「一旦客観して見ると云ふ余裕」（五八頁）に挑戦したものととも言えよう。

○五卷五号（明治四四年八月）「佳作」欄、「從兄」（73）（「赤松静太」名義）

私は半年振に故里に帰つて從兄の桂山を訪うた。家の者は皆田草取に出て桂山が一人留守をして飯を焚いてゐた。／煤つた竈に黒い釜がか、

つて、赤い焰が釜の尻を舐めてゐる。白い泡が蓋の隙から吹き出して、微かな音を立てゝゐる。／桂山は一昨年の秋右足に関節炎を患つた。それが為め右足は未だに用をなさぬ。覺束なく立つて、庭に下り敷居に掴つて左足で飛ぶやうにして、やつと竈の前の腰掛に腰を下ろした。（中略）／古い家の屋根裏は無暗と沢山の太い木が組合されて、煤に真黒く成つてゐる。／湿気の強い家の中は古い煤の香が漂うてゐる、それは、市街の煤煙のやうな芥臭くない、冷たい香である。／古い壁柱建具、皆床しい昔の香が残つてゐるらしい。機に腰を下した桂山は的も無い視線を門の柿の木の下に彷徨はしてゐる。柿木の下に鳩が二羽芥を掻き探しては何か頻りに囁んでゐる。①青葉の茂りから洩れる強い夏の光が、茶褐色の鳩の背に揺いてゐる。／桂山は着物の前をだらしなく開けて、少し前へ屈んだ胸の肋骨は数めるばかりに肉が削げて、げつそり細く成つた腹部は、喘ぐやうな呼吸につれて緩んだ皮がビクビク動いてゐる。薄い髯の伸びた顎が

妙に尖つて見える。／織りさしの白木綿に桂山の後影が淡くうつてゐる。②然かもその影は熟視すれば其の視線に堪へ得ないで消える程の弱々しい影だ。／桂山は思ひ出したやうに、私の方に視線を変へて、／「君も見たか知らんが今月の新文壇で又塙君に一本やられたよ。」／例の悪口屋が何か言つてゐましたやうでしたね。」／「塙君は私とはずんと意味を違へて攻撃してゐた。（中略）然かし私は塙君の敵としては余りに弱過ぎる、だから止した。」と言つて痩せ落ちた頬に淋しく笑つた。／「私は丁度乾いた所のやうに思はれて踏込む車もあるものだ、と言つて置いた、夫れを塙君は踏込んだ云々と言つて私を詰つた。踏み込んだと言ふのと、踏込む事もあるものと言ふのと大分意味が相違すると、私は思ふがな！それに③提灯が一張だから人の影で光りを遮さられる事もあると言つて置いた筈だ……」語尾は微に慄へてゐた。そして語をついで、／「病氣持ちは何事にも駄目だて……」「……」絶望的に言つて、軽く咳いた。／「此所

が苦しい——」胸を撫て、見せた。／④骨ばかりの手と胸を当り合ふ時、骨の音が聞えはしまいかと思つて、私は思はず顔を反向けた。

評、作者がデリケートな観方書き方は、漸やく蔗境に達して行く。会話も亦見るべきものがある。切に作者の精進を望む。（浩堂）

投書家でもある従兄・赤松桂山の病状を知らせるこの文章は、選者にも読者たちにも興味深く読まれたことだろう。二重傍線部は桂山の作『暁』をめぐる塙三葉の批判（五巻三号の「倶楽部」欄）を指すと思われる。

「小説作法」において、人間の観察を近親者から始めよ（七〇頁）という指導がある。「牛肉屋」前作が人物描写／会話文／叙景と推移していったのに対し、今回は桂山の人物描写と「家の中」の叙景が交互に記され、そこに聴覚・嗅覚表現も織り交ぜられている。また、傍線①に光の効果を描いている点にも留意しておきたい。この時期、西洋絵画の影響から、描写において光線の働きが意識されていたことは今更言

うまでもない。傍線③の話題も要するに、光の強弱によつて事物の見え方が変化することをめぐるものである。この点、例えば「文章講義雜録」の無署名「文題に就いて——海の研究——」に「一体光線と云ふものは、総ての美には深い関係がある」（一四頁）とあるように、講義録でも言及がある。

さらに、傍線②④を見てみよう。影を凝視しても消えるはずはなく、骨の音が聞こえるとも思えない。すなわちこれらは、錯覚的な印象で対象を誇張する詩的言語である。「此頃」に見えた比喩表現に続いて、詩的效果をねらう文飾が用いられている。浩堂も明らかに、それまでの投書と比較した上で賞賛しており、分量、題材、レトリックの上で、新しい試みが続けられており、単なる描写文や身辺雜記ではないと言える。

○六卷三号（明治四四年一二月）「佳作」欄、「十一歳頃」（72）「赤松晨村」名義

夜逃をした家。／少年であつた私の心にそれが何なに奇異に好奇心を惹いたらう。恐ろしく

も有つた。私は其れが非常に見たかつた。／其家は私の村の北端で、それから北は一面蒼い稲田であつた。私は午後三時頃一人で宅を出て、高い土蔵の横や青い簾の中で午睡の鼾の聞える百姓家の前を通つて、目的の家の方へ行つた。／（中略）／夜逃げをしてから廿日余りにもなる。／私は好奇の瞳を輝かせて、雨戸の閉つた人のぬない家を見廻した。／屋根の瓦に真夏の光の焰のやうな陽炎が燃えてゐる。私は東側の壁をつたつて、雪隠の所を左へ裏口へ行つた。此処には塵芥が山のやうに成つてゐる、それは平常塵捨場に成つてゐた所である。武力製の破厨炉や骨ばかりの雨傘や踏切れた草鞋が二三足も棄てられてある。此処にも瓦の竈が一ツ転がつてゐる。／ガラガラに乾いた物干竿が一本、屋根に立掛けられてある。／①周囲の稲田は強烈な日をうけて、飴色の水が温んで、プツプツ音を立て、泡を浮かせてゐる。蒼い稲葉は撚れたやうに疲れて見える。／其等から騰る蒸暑い気が南風に送られて、氣持悪しく顔を撫でる。私は

汗を襦袢で拭き乍ら、戸の隙から中を覗込んだ。

／②四方の戸の隙から、明るい光線が差込んで、家の中は可成り明るい。／古畳が三四枚庭に投げ出されて、火鉢らしい物が灰の入った儘転がてゐる。／庭の隅に三ツばかり酒樽が積まれて、上戸や櫛が手桶に入れた儘置いてある。／白い徳利が六七本棚に立てゝある。③荒廃した家の中の空気は、夏の蒸気に黄色に濁つて見えた。私は戸を明けて見る氣に成つた。／古い雨戸は砂利を噛む重い音を立てゝ少し開いた。④私は動悸が激しく打つのを覺えた大罪でも犯したかのやうに眞蒼に成つた。／氣が落付いた。私は中へ入る氣は勿論、閉める氣にも成れなかつた。手を束めて傍觀の態度に成つてゐた。／私は其儘踵を返して歸つた。⑤戸の隙から何か出て来さうで絶えず後へ振返つた。／其れは私が十一の夏であつた。

評、少年の日の心持になつて、其の当面の事柄を切に述べてゐる處に作者の實感が動いて居る。(薫園)

選評にあるように、回顧でありながら同時的な語りが採用されている。今ここを描くスケッチではなく、これまでと比べて虚構性の高い文章と言えるかも知れない。夜逃げの跡の荒れ果てた光景が細密に描かれており、「從兄」で試行された家中の觀察描写が活用されている。

具体物の描写のみならず、傍線①②の光線の意識、③の蒸気による歪みなど、空気感の演出にも余念がない。「從兄」で培つた書き方を確かなものにしていと言えよう。また④⑤のように、自身の氣分を示していることも特徴で、漫然とした描写ではなく、特定の印象を強調するものとなっている。

なぜ「十一の頃」の回顧をこのような形で書いたのか。講義録の「小説作法」が、「印象を幾度も想ひ起して心に味ひ、觀照を重ねて」記憶を鍊磨せよ(六四頁)と繰り返していたことに、その要因を求めることができるかも知れない。直近の出来事に取材した虚構性の弱い文章を書いてきた土師が、過去の印象を資源に創造性を發揮し、小説的な文章を著したは

じめが、本作なのではないだろうか。

○六巻四号「佳作」欄、「穴まで」（明治四五年一月）

(75) 「赤松景村」名義

朱地に金糸を縫うた法衣を重げに、高い木履を引摺つて、悠々と老いた僧侶は歩む。／其後から紫の袈裟を著けた若僧が、五分刈頭を下げ勝に従いて行く。／おびえたやうに照り下す冬の日に、法衣の金糸が淋しく映える。其の直ぐ後から白い棺が行く。／噫。桂山は瘦せた、私は棺を昇いだ儘考へた。生前の桂山の姿か瞭然見える。遠隔してゐて死際に会へ無かつた失望が遺瀬無く胸を圧する。／黄な無花果の葉が慌しく散る秋の半ばであつた。あ、私が神から与へられた自由を神に返して満三年に成る。命とても神から与へられたのだから何時か返さねばならぬ。私は夫れを早く返して了ひ度い。然し自ら死するのは私は余りに弱い。何時迄此の苦しい生が続くのだらう。／かすれ書きの長い桂山からの手紙の一句一句が次々に悲しい音を立

て、胸に浮かんで来る。／（中略）／会葬者の群から葬の鉦の淋しい音響が途切々々に、今桂山を葬むる紺山に鈺する。凸凹の激しい道は山に近い程悪い。赤錆びた夕日が、黄に熟した稲穂に映えて、丁度黄色の紙に黒線を引いたやうに、会葬者は一列に成つて行つた。／（中略）／焼香場から墓地へ昇る山路が古い松の幹の間に赤土の道が蜿々と続いてゐる。／白い墓石や、黒い墓石が紅葉した低い櫛の中に、松の間を通して隠見してゐる。／僧侶の忝い読経の音が、悲しく張詰めた心をそゝるやうに、哀れつぽく焼香場の辺を逍遙ふ冷たい石の上に押据ゑられた白布を覆うた棺を見た利那——桂山は冷え性だ！私の心は俄に踊つた。然し桂山には最早冷気を感じる力は無い。／伯母さん（桂山の母）が切めて死顔でもと棺に納めた桂山を私に見せた。底に紫を流した白蠟のやうな顔、朽ちた薄いい唇は最う文学を語らなかつた。／伯母さんは、無言の儘、桂山の首にかけた、白布の袋を取り出した。薄い布を透して濃厚な色彩の表紙が見

える。それは十五六冊の新文壇であつた。外に原稿用紙と、ペンとインクスタンドが入れてあつた。／＼鳥が松で鳴いた。／＼桂山は深切な村人の手に掘られた深い穴に埋まつた。(十二月廿日稿)

評、桂山は逝つたか、前号の「黒髪」を絶筆として、未来永劫子の文情に接することが出来ないか。見よ、血縁の作者が死後の哀傷を語る筆の、多くを記さずして、涙痕の紙に満つるを。泣くまいとしても泣かざるをえない沈痛な文である。(薫園)

「金」「紫」「黄」「白」「黒」「濃厚な色彩」等、色彩表現がこれまでに多く用いられている。これは一つには、当時新潮社から『闇』(明治四三年)を刊行し、『新文壇』にも「動く絵と新しき夢幻」(四巻四号、四四年一月)等の寄稿を行っていた小川未明による影響であろう。いま一つには、「創作百話」で「写生の根底は色を写すこと」(五一頁)という色彩表現が推奨されたこともあるだろう。同講義では「強烈」

な色もしくは「薄弱」な色を連続させるべきではない旨の禁則も掲げられている。その点、本作は気が配られているし、僧侶たちの鮮やかな法衣や『新文壇』の「濃厚な色彩」と、桂山の纏う布の白は、強弱の対比にある。傍線①の絵画を連想させる描写は、色彩表現を取り入れた試みとしては特筆すべきだろう。

「多くを記さずして、涙痕の紙に満つる」という感想はどのような表現から導かれているのだろうか。確かに「悲しく張詰めた心」等の一部を除き、悲嘆などの感情を直接的な語で表現することは避けられている。その一方、生前を想起させたり、反射的に生者に対するような心配を行ったりする過去との隔絶、連帯感を刺激して共感を呼ぶ(桂山の投書を思い出させもする)『新文壇』の一語、色彩表現をはじめとした事物の描写といった、間接的な記述が「涙痕」を読み取らせる。「創作百話」の「情緒を写す場合は、多く説明するよりも描写の方を取るべし」(八八頁)という「叙情」の指導に従っているとも言える。懸賞短文の時点から、土師はほぼ一貫して描写を活用している。「描写の力」(同)を重視する指導が彼

に響いているとしてもおかしくない。

四、現時点での概括と展望

本ノートに記した作業について、以下のように仮説や考察を述べておこう。

・土師清二・赤松静太の投書は、描写を中心とする点では一貫しているが、日記文・写生文・人物描写・詩的表現など、様々な表現形式を段階的に試みている。なお、「穴まで」以降、時期を開けて八卷二号（大正元年十一月）に「二十六の男」、四号（翌一月）に「肺を病む男より」を発表しているが、「穴まで」で試みられたような色彩表現は希薄となっていく。このことからわかるように、一定の得意分野を持つというよりは、様々なアプローチを繰り返している時期だったと言える。

・とは言え、もう少し踏み込めば、一定の嗜好性は見出せるだろう。彼は七卷一号「評論文」欄に「『山河』を得て」を投書している。これは表題通り、薫園の歌集『山河』の評論である。

ここで土師が賞賛する薫園の歌は、多くが微温的な、積極的な解釈によって賞味できるものである。「『山河』を得て」を通して他の投書を眺めれば、説明的でない、暗示的な表現が採用されているとも取れる。その点、「創作ビジョン⁽⁵⁾」と呼べるものを獲得していた可能性はある。

・土師の投書に見られるレトリックについて、影響を与えたと思われる指導が、「文章作法」「小説作法」「創作百話」等に見られた。土師は指導の忠実な実行者であった可能性が高い。

・また、このような指摘が可能になるのは、講義録の指導が、具体的に使用可能な技法を中心としているからである。しばしば抽象的な助言や心構えが説かれる同時期の『文章世界』（博文館）の小説指導とは、その意味で対照的である。

これらの成果を踏まえて、日本文学学院の指導と、その影響下で起こった文章および小説の熟達について、ひいては明治・大正期の小説指導と初学者の文

章修行のあり方について、考察を重ねていきたい。

本研究で考える「熟達」は、ひたすら上達することを意味していない。失敗や、後に使われなくなる技巧を一時的に使ってみる行動も含めた、試行錯誤を繰り返していくプロセスを指している。実際、土師の長い文業に目を向ければ、日本文章学院の指導や『新文壇』でのごく僅かな文章修行がもたらした恩恵は、直接的には観測できないだろう。デビュー作『水野十郎左衛門』はともかく、代表作『砂絵呪縛』の文体においては、講義録が奨励したところの「描写」に相当する表現はかなり削ぎ落されている。だが作家において重要なのは個々の技法よりも、継続的に小説を書き続けられる心的能力の方であろう。一生使える技法形態ではなく、環境・条件の変化の中でも書き続けられる力を涵養する——それこそが日本文章学院のような媒体の意義ではないか。

(1) Kaufman, J. & Beghetto, R.: Beyond Big and Little: The Four C Model of Creativity. Review of

General Psychology, Vol.13, American Psychological Association 二〇〇九＝平成二一年三月

(2) 横地早和子『創造するエキスパートたち アイティストと創作ビジョン（越境する認知科学6）』（共立出版、令和二年九月）一三四頁

(3) 日本文章学院の詳細は、宮崎睦之「〈独習〉と〈添削〉と——佐藤義亮の講義録——」（『日本近代文学』第六〇集、日本近代文学会、平成一一年五月）、同「講義する雑誌、講義する書物——新潮社・明治四十年代、投書雑誌の黄昏にて」（『立教大学日本文学』第八二巻、立教大学日本文学会、平成九年七月）、及び山本歩「日本文章学院とその小説作法」（『尚綱語文』第九号、尚綱大学文化言語学部・現代文化学部・日本文学懇話会、令和二年三月）を参照。

(4) 土師清二「『砂絵呪縛』を書くまで」（『文壇大家花形の自叙伝』（『現代』付録、大日本雄弁会講談社、昭和一一年九月）

(5) 「創作活動全体をオーガナイズする」「認知的な枠組」（同（2）四八頁）を指す。

〈謝辞〉

本研究はJSPS科学研究費補助金 20K12940の
助成を受けたものです。

仮定法に見る主体性育成の差

― 国語科と英語科のはざまで見つけたもの ―

長 倉 伸 子

一 はじめに

現在勤務している高等学校において、国英双方の免許を取得している関係で、国語科から英語科に転任して授業している。この経験により、英語の授業では普通に行われている問いかけが、国語科では殆ど行われない発問であることに気付いた。それが何を意味するのか、ずっと気になっていたが、幾つかの事例にあたるうちに、日本の教育に要求され続けている主体性、積極性の育成に繋がるように思われ、今回ここに提示することにした。

二 学習指導要領や実践に見る日本の文学的文章の

「読み」の指導

『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説』では、文学的文章の「C読むこと」において、

オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。

としており、「第1学年及び第2学年の内容」の「考えの形成」にこの項目オについて次のように記す。

「文章を読んで理解した内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつことを示している。文章の内容と自分の体験とを結び付けるとは、文章の内容を、自分が既にもっている知識や実際の経験と結び付けて解釈し、想像を広げたり理解を深めたりすることである。また、感想をもつとは、文章の内容に対して児童一人一人が思いをもつことである。読み手の体験は一人一人異なることから、どのような体験と結び付けて読むかによって、感想も異なってくる。指導に当たっては、児童の発達や学習の状況に応じて、

文章との関連を考えながら、実際の経験を十分に想起できるよう工夫することが考えられる。」

更に、「第2節 第3学年及び第4学年」の同項目では、

オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。

とし、「考えの形成」の項目において、オについて

「第1学年及び第2学年のオを受けて、文章を読んで感想や考えをもつことを示している。第3学年及び第4学年においては、文章の内容だけではなく理解したことに基づいて、感想や考えをもつことに重点を置いている。(中略) 感想や考えをもつとは、文章を読んで理解したことについて、自分の体験や既習の内容と結び付けて自分の考えを形成することである。ここには、疑問点や更に知りたい点などを見いだすことも含まれる。なお、感想や考えをもつことは、自分が文章をどのように捉え、理解したのかを改めて確かめることにもつながる。」

同「共有」では、

これらの感想や考えは、同じ文章を読んでも文章のどこに着目するか、どのような思考や感情、経験と結び付けて読むかによって、一人一人に違いが出てくる。これを共有し、一人一人の感じ方などには違いがあることに気付くとは、同じ文章を読んでも、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くとともに、互いの感じたことや考えたことを理解し、他者の感じ方などのよさに気付くことが大切である。」

(傍線は長倉が添付)

と記されている。では、「文章を読んで理解したことについて、自分の体験や既習の内容と結び付けて自分の考えを形成する」読みが、現場でどのように問われているのだろうか。

日本の国語教育の発問例を見ると、その殆どが生徒たちが登場人物の立場に立って、あるいは成り代わってみて、その人物の心情を把握する、という方法をとっている(註1)。例えば、小学4年生の「ごんぎつね」の実践では、兵十が誤ってごんぎつねを撃ってしまった時の心情を、兵十のことばで表現し

てみる、または兵十そのものを演じて言葉を発して
みるロールプレイをおこなったりして、生徒に心情
把握をさせるものが殆どである。

また、過去に、拙者が生徒に対し、「あなたが○○（主
人公）だったらどう思いますか？」と発問した授業で、
生徒が答えられず沈黙してしまった経験がある。そ
の研究授業後、発問検討会で、次のような示唆を指
導教師の一人から頂いた。

『あなたが○○だったら』では、生徒は自分を登
場人物に重ねなければならぬので、とても意見が
出しづらい。「この時○○はどう思ったかな？」と発
問すれば、あくまでそれはその物語の場面内の出来
事で、生徒は自分の意見を自然に登場人物の心情に
投影して表現し易い」。

その後、実際にその発問を他教室の授業で行うと、
生徒が設問に対しスムーズに反応することができた。

三、英語学習例文に見られる学習者の主体性

If I were a superman, I could help you.

（もし私がスーパーマンなら、あなたをたすけられ

るのに）
（註2）

これは、仮定法の説明をする場合の典型的な例文
の一つである。仮定法は英語圏の国では日常生活で
も頻繁に使用される。

If I were you, I would go to the dentist.

（もし私があなただったら、歯医者に行くのに）

これは、拙者が親知らずを抜くのを逡巡した際の
米国の歯医者（註3）の言である。

If I were you...（もし、私があなただったら）

というこの文章を、先の兵十のくだりで使用する
としたら、

If you were Heiyou, what would you think?

ということになる。まさに「あなたが兵十だったら、
あなたは、どう思いますか？」という問にならざる
を得ない。尋ねられた相手は兵十に成り代わるので
はなく、この問に対する解答はもちろん

If I were Heiyou...

となり、おのずと自分（你）の意見を述べることとなる。
しかも、このような問は、Creative Thinking（創
造的思考）と呼ばれる、主に教育現場で使用される

間であるという。^(註3) 日常よく使われるものは、やはり

If I were ～ と「I (私)」を主語とした、私自身の意見をダイレクトに求める文章であり、他人に成り代わって意見を言う習慣は極めて少ない、と言えそう。

四、まとめ

よく、英語圏（特に米国）では、幼少期からプレゼンテーションの練習をさせられるため、彼らは自分の意見を堂々と発表できるのだ、と言われる。確かに、当地の高校や大学ではディベートやプレゼンテーションの練習を授業で行っている。最近日本の国語教育にも導入されている米国の幼稚園や小学校校での Show and Tell（自分の好きな物紹介）のような教育現場での例もある。^(註4)

しかし、ここで触れたように、英語そのものの持つ性格により、意識せずに、通常、常に主語を明記しなければならぬ文法を持つ言語である英語を使用するが故に、生まれた時から日常的に己の意見を求められ

る環境が当地に存在すると言えるかもしれない。移民の多い国では、個人の意見をはっきり表明することが死活問題であることを考えると、それも当然であるようにも思われる。新しい指導要領では、「表現」が最初に掲げられ、文学作品の読解や鑑賞は最後のほうにあげられている。確かにグローバル化の進む社会では、相手に向かって、論理的に話ができる、自分の意見をはっきり言える生徒を育成することが急務なのかもしれないが、生まれつき自己主張の必要性がある文化を見習うために、そうではない文化に生きる私たちが指導の方法の舵を切って、生徒を自己主張できるように訓練し、自国文化を育んできた「文学を読むこと」を削ることで、何か大切な物を失うのではないかと懸念している。「文章を読んで理解したことについて、自分の体験や既習の内容と結び付けて自分の考えを形成する」読みを生徒が行うために、日本人の文化を活かした自己表現ができる設問を編み出す必要性を切に感じている。

註1 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究

センター国語科『「指導と評価の一体化」のための

学習評価に関する参考資料小学校国語』事例4

「内容のまとめり 読んで感じたことや考えたこと
をまとめよう（こんぎつね）（第4学年）C 読

むこと 図4・・児童1が感想を書くための言葉

を見つけようとしているワークシート」（令和2年

3月）pp.73

をはじめ、同様の発問は多くの実践例で散見され
る。

註2 綿貫 陽『徹底例解ロイヤル英文法改訂新版』

2001年 pp.547

註3 Mustafa Şenel i Gaziantep University

Development of Creative Thinking Skills of

Students Through Journal Writing

International Journal of Progressive Education,

Volume 15 Number 5, 2019

等の文献で Creative Thinking に ついて検討され
ているが本稿でいう「成り代わり」の発問は見ら

れない。

本校 ALT Ms. Julie Waterman から同様の意
見を取材した。

註4

長倉伸子「買い物ごっこから経済学習へー米国メ
リーランド州公立小学校での実践からー」『国
語国文研究と教育』第四十七号（二〇〇九年）
pp.53

令和三年度卒業論文題目一覧(現代文化学部・文化言語学部)

熊本市の公立学校における

校歌の地理的・言語的特徴に関する研究

猪本 妃依

日韓のアイドル文化の特徴について

今里明日香

中高生の自己肯定感についての研究

～日本と韓国を比較して～

岩田 真析

ジャニーズアイドルにおけるジェンダー観の分析

榎本 早姫

日本社会に韓流が起こした現象について

大橋 彩乃

日韓両国の食文化の比較研究

～韓国に進出した日本の外食産業を中心に～

緒方 美桜

日韓両国のブライダル文化について

梶原 瑠花

日韓両国の化粧文化に対する比較研究

門崎 香琳

コンテツツリズムを用いた地域再生の

可能性について～人吉を事例に～

桑 陽菜

市川春子作品におけるキャラクターのあり方について

小佐々 柚希

菊池一族についての一考察

坂本咲野花

ウィズ・アフターコロナ時代におけるまちづくりについて

志賀綾寿香

夫婦別姓の議論に関する一考察

～大学生における意識調査をもとに～

新塘 咲紀

競走馬のネーミングに見られる音象徴性

菅野 晴圭

清正公の一考察

杉本 未来

中国語圏におけるジャニーズアイドルの受容

～中国大陸と台湾を中心に～

高瀬美希子

日韓両国の女子大生のパーソナルスペースについて

～比較研究～

高見 真歩

接点から見る江戸川乱歩作品論

日韓両国の民間美容についての比較研究

中山 悠里

戦国武将キャラクターのファンコミュニティについて

中山 美友

松本隆の歌詞におけるジェンダー観

マンガを映像化した作品における

オノマトペの再現に関する研究

畑野 萌

『魔進戦隊キラメイジャー』における

女性キャラクターのジェンダー論的分析

深見 優香

日本と中国の観光政策と日中関係

近現代文学における女性表象

増田 聖

～女性作家と男性作家の相違～

明治期文学における青年像

松岡あかり

～夏目漱石『三四郎』を中心に～

百人一首の一考察

村田 彩乃

20世紀前半における化粧の変容と女性表象について

演劇マンガにおける身体的表現と内面的表現の分析

村田 祥穂

山下 歩

山野 瑞季

村本 優紀

山下 歩

山野 瑞季

日本語と韓国語の漢字語の比較研究
ジェンダーギャップ指数の分析

渡邊 有美

ー日本と上位国の比較を中心にー

宮崎 友理

阿蘇地方の地域復興に関する研究

井本 佳那

ーオーデオ道場の焙煎珈琲を中心にー

※ 第十二回 尚綱大学文学賞は新型コロナウイルス等の影響により、
文学賞自体しばらく中止の方向となりました。

執筆者紹介(掲載順)

武田 昌憲 本学教授

畠山 真一 本学教授

山本 歩 本学助教

長倉 伸子 本学園尚綱高校教諭

尚綱語文 第十二号

令和四年三月十四日 印刷

令和四年三月十六日 発行

編集・発行者 尚綱大学文化言語学部・現代文化学部・

日本文学懇話会

〒862-8678

熊本市中央区九品寺二一六-七八

電話 ○九六(二〇三) 六三〇〇(代)

株式会社 協和印刷

熊本市中央区出水五一-三一

電話 ○九六(三七五) 五三一

印刷

題字 林田俊一郎